

No. 152 (1/2)

# 翼

# の

# 王

# 国

全日空機内誌 Inflight Magazine of All Nippon Airways

特集 **恋人たち。**

May 1994 No.299

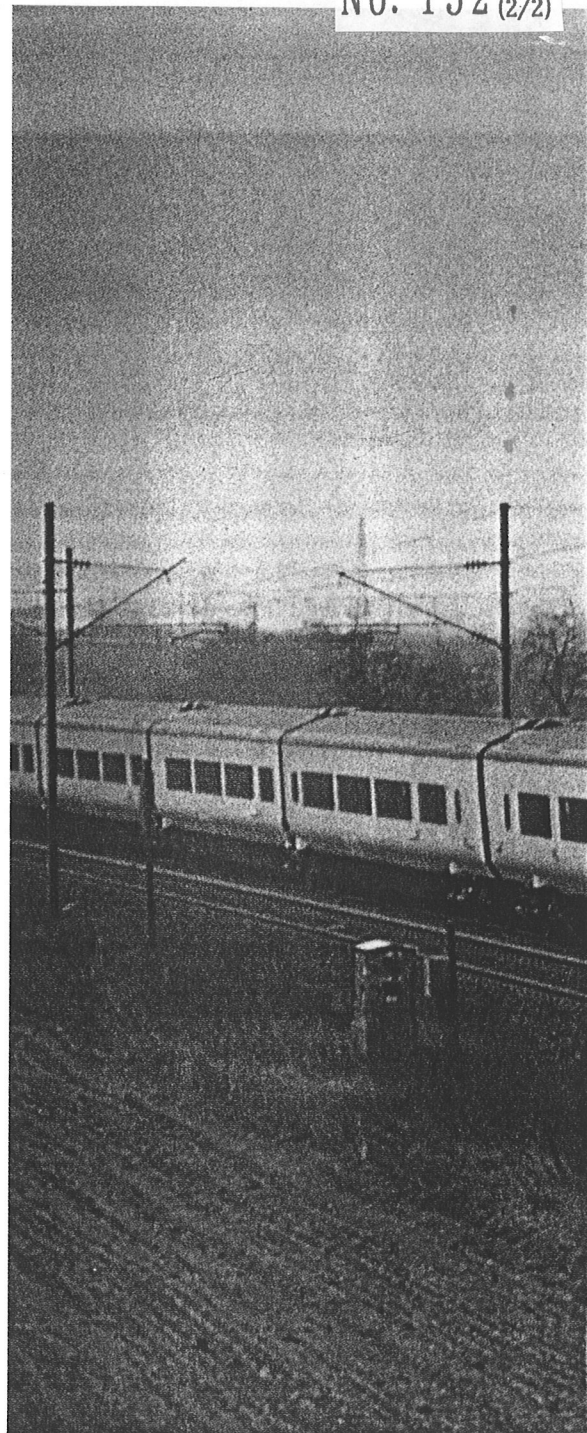
**ご自由に  
お持ち帰りください**

機内サービスのご案内  
音楽・ビデオプログラム／機内図／航路図

5

16134  
1994.

**ANA**  
All Nippon Airways



1753年フランスの地質学者ニコラ・デマレがフランス国王ルイ十五世にドーバー海峡海底トンネルの計画をすすめてからおよそ240年目。ヨーロッパは陸続きとなった。トンネルの実現までには、いろいろな人々が情熱を傾けた。『シャーロック・ホームズ』の生みの親コナン・ドイルも第一次大戦の折、兵と食料の安全な輸送法として考えていたようだ。英国の「栄光ある孤立」という姿勢はいまでも根強いものがあるけれど、ユーロトンネルによってヨーロッパに新しい変化が起こることは間違いないところだろう

工費七百億ドル)が推進中とのことだし、日本と韓国を結ぶ「日韓トンネル」を対馬海峡に建設する研究も関係者によって行われているという話も伝わっている。いずれも、二十一世紀にかける夢であるが、ユーロトンネルはれっきとした現実であり、鉄道ルネッサンスが軌道に乗れば、将来は「EUサミット」(首脳会議)などは特別列車の中で行われるかもしれない。

日本には「子は夫婦の鏡<sup>かすがい</sup>」という諺があるが、私は英仏両国に通算十年、特派員生活を送った体験からすると、ユーロトンネルにはジョン・ブル(英国)とマリアンヌ(フランス)の鏡という存在理由があると思う。両者の間のわだかまりは、ユーロトンネルができるのに二百年余りを要したことに象徴されている事実<sup>じじつ</sup>に照らすと、たかがトンネルぐらいで解決できるはずなのに、されどトンネルの

存在は無視できないと思う。

ジョン・ブルはマリアンヌを「カエル野郎」(フロッグ・イーターズ)とよび、マリアンヌはジョン・ブルを「うさぐさい奴」(ヘルフィード・アルビオン)とよび、互いに相手に不信感を抱きつつ、激しく自己主張をする。それでいて共通の文明のサイバルのために同盟国となつて戦うが、平時においてははた目からは絶えずいがみ合っているカップルだ。マリアンヌは聖女ジャンヌ・ダルクを火刑に処し、英雄ナポレオンをセント・ヘレナに島流しにしたジョン・ブルの蜜行をいまだに許さない。ジョン・ブルはジョン・ブルでノルマンディ公ウイリアムによるイングランドの征服、ナポレオンの侵略の脅威を忘れてはいない。ユーロトンネル開通でパリ発ロンドン行のユーロスターの超デラックス終着駅が「ウォータールー」であるというのは偶然

の一致とはいえマリアンヌにはおもしろくないに違いない。その分、ジョン・ブルはほほ笑んでいる!

ジョン・ブルの経験主義論法とマリアンヌの帰納的論法はつねに平行線を保ち、こればかりはトンネルで解決はつくまい。それはさておき、ジョン・ブルは生れてから死ぬまで、「世界は英国を中心に動いている」と信じ、マリアンヌは、「フランス人以外の世界の人間がなぜフランス語を話さないのか」といぶかりながら一生を終える——というジョークがあるが、両国に住んでみるとジョークのリアリティーが実感できる。それだけに、ユーロトンネルがどんなジョークを新たに生み出すかに私は興味津津なのだ。というのも、トンネル開通を見込んで、英国人がカレー一帯から最近ではノルマンディーとしてプロヴァンス地方にまで土地を買って、「安住」しようとしているとザ・タ

イムズが報じているからだ。

逆もまた真なりかというときに非ずで、マリアンヌは「ドウス・フランス」(うまし国フランス)を離れようとはしない。

最近、フランス政府は「フラングレ追放」(英語狩り)を始めたが、これはこれまでも何回となくやったが効果がないままに終わっているのだ。マリアンヌは英語——おもに米語だが——を目の敵にするが、ジョン・ブルはウイリアム征服(一〇六六年)のころから数多くのフランス語を英語に取り入れているのである。ユーロトンネルのTUNNELも語源は、古代フランス語のTON(N)ELと英語辞典に出ているが、フランス語でも発音はテュンネルだがスペリングは同じで、英語を借用しているのだ。何のことはない、「英語」と「フランス語」は千年以上も前から「専用のユーロトンネル」で結ばれているのである。■